

笹川保健財団 研究助成  
助成番号：2025-02

2026年 3月 5日

公益財団法人 笹川保健財団  
会長 喜多悦子 殿

2025年度笹川保健財団研究助成  
研究報告書

標記について、下記の通り研究報告書を添付し提出いたします。

記

研究課題

がん患者を親にもつ Teenager を支えるプログラムの普及と発展に向けた介入研究

所属機関・職名 秋田大学大学院医学系研究科・講師

氏名 赤川 祐子

## 1. 研究の目的

がんの親をもつ18歳未満の子どもは約8万7千人であり、その約4割はTeenagerである。Teenagerにとって親のがんは、日常生活や親子関係の変化、同世代との比較などの心理社会的影響をもたらす。心身の発達を守る支援が課題であるが、日本での支援は未開拓であった。

2024年度に笹川保健財団の助成を受け、Teenagerに対するTeen CLIMB®プログラムの日本語版を開発した。本年度は日本での普及と発展を目指し、以下2点を研究目的とした(図1)。

- 1) **普及**：支援者に対してプログラムのファシリテーター養成講座を開催し、支援者の意識向上や各施設での開催可能性を検討する。
- 2) **発展**：プログラムによる当事者(親のがんと診断されたTeen)への心理社会面への効果を検証する。

**背景**

- ・がん患者を親にもつTeenagerは心理社会的影響を受ける場合があり、心身の発達を守る支援が必要である
- ・2024年度、貴団体からの助成を受けプログラム(Teen CLIMB)を開発した
- ・次のフェーズとして、プログラムの普及と発展が必要である

**テーマ**  
がん患者を親にもつteenagerを支えるプログラムの普及と発展に向けた介入研究

**普及**

**研究A**：支援者に対して養成講座を開催し、支援者の意識向上や各施設での開催可能性を検討する

対象：小学生版CLIMB®ファシリテーター資格取得者、思春期・青年期に関わる教育関係者：20名

研究デザイン：縦断的質問紙調査

方法：プログラムの養成講座を開催し、講座前・直後・3か月後に質問紙調査を行う。支援の意識向上や各施設での開催可能性を追う。

**発展**

**研究B**：プログラムによる当事者への心理社会面への効果を検証する

対象：親のがんと診断された12~19歳 10名

研究デザイン：縦断的質問紙調査

方法：プログラムを導入とし、介入前・直後・3か月後に質問紙調査を行う。QOLとストレス反応の変化を明らかにする。

**結果の統合**

支援者の育成・プログラムの実装・当事者への効果の検証による  
持続可能性の高い支援体制を構築する

図1：本研究の全体像(がん患者を親にもつteenagerを支えるプログラムの普及と発展に向けた介入研究)

## 2. 研究の内容・実施経過

### 1) Teen CLIMB®プログラムについて

米国で開発されたがんの親をもつTeenagerを対象とした心理社会的支援プログラムである。

**目的は、子どもの持つ力を引き出し、親の病気に関連するストレスに対処する能力を高めることであり、構造化されたセッションで、気持ちを表現するテーマを基にアクティビティを通して同じ境遇の仲間と交流する。**

プログラムの詳細は表 1 の通り。毎回の開始時に日記を書き、アイスブレイクする。日記にはテーマがあり、大切な人ががんになってからの心境を問うものである。例えば「大切な人ががんになった時どう感じたか」「家族の中で変わったこと」等。

①愛する人のがんの話を他人と共有し、孤独感を和らげる。

アクティビティ（親のがんについて共有する自己紹介シート）を用いて、幸せ・楽しい気持ちを表現する。

②がんとその治療について知識を得る。

アクティビティ（病院見学ツアー）を通して、混乱の気持ちを緩和する。

③悲しみの感情を表現し、緩和する。

アクティビティ（気持ちを表現するお面作り）を通して、悲しい気持ちを表現する。相談できるリソースを考え、自分のサポート体制のリストを作成する。

④Teen の持っている強さを引き出し、不安を緩和する。

アクティビティ（強さの箱作り）を通して、恐怖や不安な気持ちを表現する。

⑤怒りの感情を適切に表現し、対処する方法を考える。

アクティビティ（ターゲットプラクティスという怒り感情を発散する方法）を学び、怒りを適切に表現する。

⑥がんと診断された愛する親とのコミュニケーションを手助けする。

アクティビティ（Teen が選ぶ音楽と歌詞）を用いて、別れの言葉と区切りの重要性について考える。

セッション	目的	気持ち	アクティビティ
1	愛する人のがんの話を他人と共有し、孤独感を和らげる。	幸せ・楽しい	家族のがんについて共有する自己紹介シート
2	がんとその治療について知識を得る。	混乱	病院見学ツアー
3	悲しみの感情を表現し、緩和する。	悲しみ	気持ちのお面作り サポートシステムのリスト作成
4	Teenの持っている強さを引き出し、不安を緩和する。	恐怖・不安	強さの箱作り
5	怒りの感情を適切に表現し、対処する方法を考える。	怒り	ターゲットプラクティス（怒りの感情を発散させる方法）を学ぶ
6	がんと診断された愛する親とのコミュニケーションを手助けする。	別れの言葉と区切りの重要性	Teenが選ぶ音楽と歌詞、励ましの言葉を共有する
<p>【Teen CLIMB®ノート】初回で全員に配布するノート。各アクティビティ前に日記を書くだけでなく、気持ちを表現するための実践例、対処する時のコツ、読み物が含まれる。</p> <p>内容の一部）・「幸せを作り出す」：持続的な幸せを得るエクササイズを紹介している          ・「私のサポートシステム」「私の強み」：Teen自身が考え、いつでも見直せるように書き込むことができる          ・「思春期」や「喪失」についての詩</p>			

表1：Teen CLIMB® の全体像

## 2) 研究 A : ファシリテーター養成講座 (普及)

2025 年 6 月、明治安田生命本社ビルにて、教育・医療・福祉関係者を対象にファシリテーター養成講座を開催した。

講座前・直後・3 か月後の 3 時点で縦断的質問紙調査を実施し、教育効果（思春期の子どもへの関わり方の自信と難しさ、支援の重要性等）および各施設における導入可能性を調査した。研究参加者は 40 名、有効回答は 30 名（75%）であった。



## 3) 研究 B : Teen CLIMB®プログラムの実施 (発展)

2025 年 9 月、東京・御茶ノ水ソラシティにて、Teen CLIMB®プログラムを開催した。

秋田、福井、東京、大阪、愛媛、福岡、沖縄から集まった 10 名の Teen（12～24 歳）が参加し、1 日をかけて 6 つのセッションを体験した。昨年度参加者の意見をもとに、マニュアルや Teen ノートの表現などを改訂し、より充実した内容で実施した。

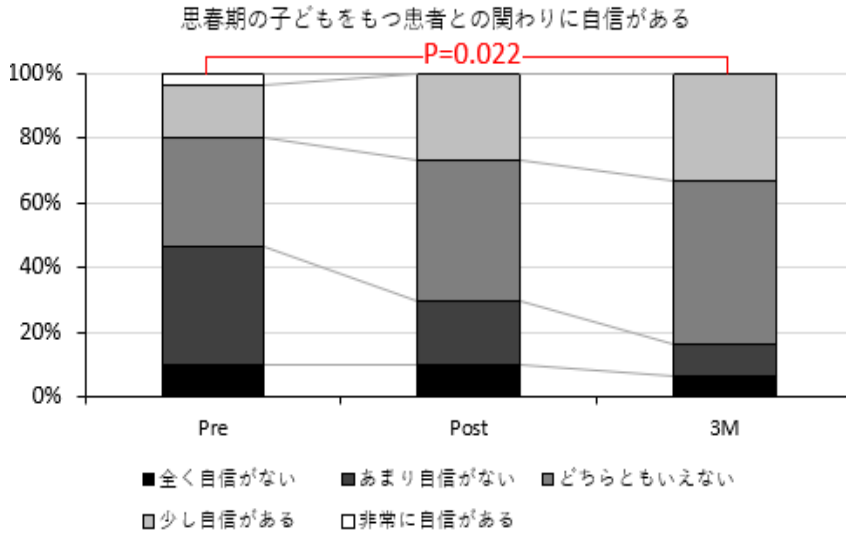
セッションでは、自己紹介やアイスブレイクを通して安心して話せる雰囲気づくりを行い、テーマに沿って自分の気持ちを書き出したり、体を使ったアクティビティを交えながら、感情に向き合い仲間と共有する場を設けた。



### 3. 研究の成果

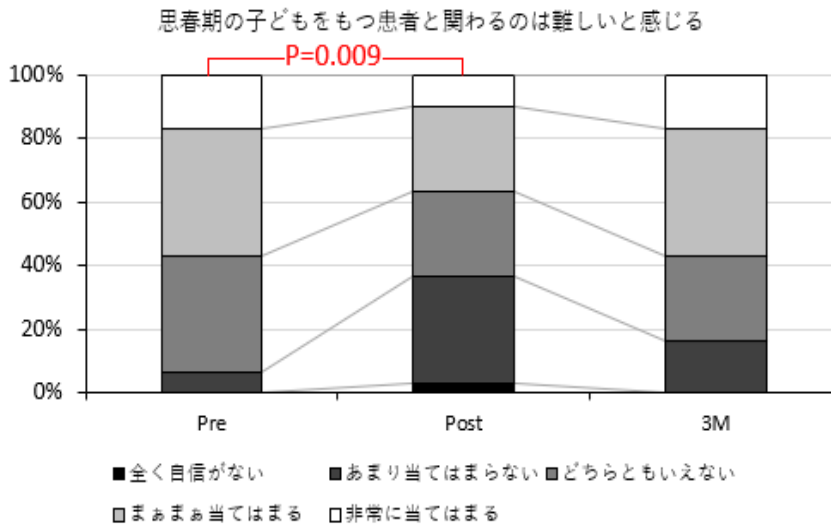
#### 1) 研究 A : 養成講座の教育効果

・思春期の子どもをもつ患者との関わりの自信は、講座前と直後で有意に向上した ( $P=0.022$ )。



・患者と関わる難しさは、講座前と直後で有意な低下が認められた ( $P=0.009$ )。

ただし、3 か月後には講座前の水準に戻る傾向が認められた。



・思春期の子どもへの関わりの自信は 3 時点で変化はなく、難しさは直後・3 か月後に軽減傾向であった。

・患者・子どもへの支援は全参加者が「重要」と回答し、理由として「親子双方の心理的・精神的安定につながる」「患者の状態の家族全体への波及」「子どもの日常への影響を軽減する」「子どもの将来・人格形成への影響」などが挙げられた。

## 2) 研究 B : プログラム参加者の声 (一部)

- ・「同世代の子たちの話が聞けてとてもいい経験になりました」
- ・「普段友人にわざわざ言うことでもないからと閉じ込めている『親のがん』についての負の感情を出せる貴重な場であること。専門の大人たちが見守ってくれていて安心して話せる。いろんな人と交流できたこと」
- ・「テーマに応じて文章で気持ちを書き出すことで、すっきりしたことや自分の気持ちの整理ができた。またその気持ちを似た境遇の同年代の人と話を共有できたり、異なる意見も知ることができとても有意義な時間になった」



## 4. 今後の課題

研究 A (養成講座の教育効果) については、3 か月後に一部指標が講座前の水準に戻る傾向が認められた。これは単回の講座のみでは支援の定着に限界があることを示唆しており、継続的な学習機会や実践と連動した支援体制の構築が求められる。

研究 B (当事者の心理社会的効果) については、プログラムによる当事者への心理社会面 (QOL、ストレス反応度等) への効果の分析を引き続き実施し、科学的エビデンスの確立を進める。

また、プログラムの各施設における持続的な導入に向けては、支援者のネットワーク形成や組織的な実施体制の整備が今後の重要課題となる。

## 5. 研究の成果等の公表予定 (学会、雑誌)

### 【学会発表】

第 31 回日本緩和医療学会学術大会 (2026 年) において、「親のがんになった思春期の子どもへのサポートプログラムファシリテーター養成講座の教育効果～養成講座前・直後・3 か月後の 3 時点による縦断的質問紙調査～」として発表予定。

### 【論文発表】

学会発表後、査読付き学術雑誌への投稿を予定している。

以上